

船水武五郎伝

— 製紙界の功労者 —

成田 末五郎

一、はしがき

明治開国の進運に身を挺して國家の興隆に貢献したものは史乘に多く顕れている。然るにその中から津輕人を拾い上げて見るとまことに寂しい感じがする。何故か？人之を評して東北人は維新のパスに乗り遅れたとか、鈍重の故にその機を取り逃がしたとか、中央に遠いために後進性を餘儀なくされた等と申されている。

併し郷土人には葉がくれに、或は縁の下の力持ちになつて明治文化に貢献したものは決して少くはない。吾々は今明治百年を濶に嚴密な意味に於て文化の内容を吟味し、吾々の先輩の業績を掘下げて認識を改める必要がある。

白河以北一山百文などと卑下したのは東北を知らぬ中央人の言である。貧賁に於て多様性に於て日本という統一文化の担い手の榮譽を東北人の人々から奪つてはならない。かつて苛烈な自然環境と異質的な歴史社会の間に入つて親子幾十代、ここに作りあげた地方文化は高く評価されてよい内容をもつてゐる。とかくマスコミの線に登場したものの功績は頭れるが、然らざるものは下積みになるのはやむを得ないことながら、これはまことに遺憾なことである。地方の歴史を掘り下げる程にその感を強くするので

ある。明治百年。葉がくれに又縁の下に身を挺して働き敢て酬を求めなかつた我々の先輩の業績を憶う時、新しい日本文化の礎石をコソコソと固めてくれた多くの先輩に対し感謝と畏敬の念を禁じ得ないものがある。

ここにその一人近代日本の製紙界に貢献した船水武五郎氏について聊かその足跡を述べて見よう。

私が船水氏を知つたのは昭和二十二年即ち終戦後のことである。同氏夫妻は東京での空襲に罹災し郷里弘前に疎開された時からである。その時氏は七十七才であつたが夫妻共憂樂としていた。

或る日薄田斬雲氏（本名貞敏、弘前出身著述家、東京から疎開）が弘前図書館に私を訪ねられ、敗戦でたなきのゆえ、荒蕪した郷里を救かれて、地方青年の将来のために、明治生れの先輩が何んとかしなければならぬではないかと提言された。まことに當時の社会や青年の気風は患うべきものがあつた。これに同感であつた私は、有志の人々に連絡して山道町成田圃科医宅に集まり薄田氏が座長となつて明治生れの人達は大いに氣遣をあげた。虚脱状態の郷党に活を入れようとしたのであつた。

工藤十三雄氏や中西酉蔵氏、船水武五郎氏等郷党の先輩ばかりでなく、弘前高等学校校長栗原一男氏、元才八師団高道副官池田信吉氏等も参加し先輩と後進の連絡を図り後進に暖い手を差し伸べようという趣旨で北門会を作ることにした。その年の十二月二十一日聖愛高等女学校で創立総会を開き船水氏は推されて理事長になつた。この会合には帰郷中の大学生達も参加した、それで私は船水氏が郷党の大先輩で郷土出身学生のために修養社（東京学生寮）又は青森県奨学会に献身的に働いて来られた方であることを知つ

た。

それ以来北門会の事務所を弘前図書館に置きその事務を委嘱された私は船水氏に接触する機会が多くなり、直接間接に船水氏の人となりや業績を知ることが出来た。然しアメリカ軍占領下にあつた吾々は、会の組織運営について一々進駐軍の預命を待たねばならず、役員に覚書該当者（太平洋戦争推進に關係した責任あるもの等に関する覚書）がいることを許さない令達があり、又公共施設の中に民間団体の事務所を置くことを許さないなどの干渉を受け市当局も頭を悩し、遂に事務所を船水氏の自宅に移され（昭和二十五年）会の発展は思うように進まなかつた。そして昭和二十八年船水氏は再び東京に居を移し昭和三十三年六月廿七日、八十八才の生涯を東京の自宅で卒えられたのである。私は二十二年から二十八年までの七ケ年、氏の晩年に接しただけでその全貌を知るものではないが、この人は典型的な弘前人であり、北奥が育てた畏敬すべき先達であるという感を深くした。船水氏の業績を紹介するには修養社又は奨学会の關係の方は最も適当と思うが遺族から得た僅かの資料をもとにしてここにその一端を述べることにする。

## 二、船水氏の生い立ち

船水氏は明治三年一月船水新五兵衛の二男として弘前城下在府町に生れた。父は津軽家十二代承昭公に仕え、納戸頭を勤め、知行百石、四拾俵の給付を受けていた。母は神家の出身で、珍田捨巳氏の母とは姉妹であるから船水氏と珍田氏とは従兄弟の間柄である。

船水家の遠祖は船水館（弘前市船水に館址あり）の主と伝えられる旧家である。明治維新番士の生活は大きく転換しなればならなかつた。堯藩に當つて番士に先ず掃蕩を勤め領内の富貴から田畑を買い上げ、又は寄附を得て之を藩士に分与し、領内各方面に在宅することになつた。それは明治四年であるから船水氏二才の時である。どの藩士もこの変動に將來の身の立て方、くらし方に悩んだことは勿論である。農耕の知識がない上に、体力的にも自信なく、その道に進んだものはまことに少なかつた。士農工商の階級は觀念上では打破することは出来ても、肥料補を担ぐ百姓、ハツビに身を固める大工、前掛けに算盤を持つ商人になりきることは出来なかつた。それかといつて新しい政府の役人になりつくには門閥が物をいうし適当な生計の道を選ぶに何れも迷つた。船水家は田舎館村垂柳に在宅したが間もなく方向を転換した。その間の事情は明でないが母方の神家は他の藩士と共同で北郡相内方面に牧場を経営したから、その事業に提携したのであろうか、兎も角當時武士の商法と世間からいわれたように、船水家も新しい事業に失敗し家計に苦しんだ。

氏は明治十六年十三才で東奥義塾の中学科に入学した。十八年津軽承昭公は英濤公を伴つて東奥義塾を視察した時は三年生であつた。この時論語の講義をして御目かけ優秀な成績を示して賞に預つた。氏は英濤公とは生涯を通じて深い關係を持たれたがこれは公と最初の対面であつた。明治二十年五月には義塾の本科（高等普通科）に入り大いに頭角をあらわした。菊池九郎氏（東奥義塾の創設者の一人）や米人教師ワイヤー氏に特に愛された。菊池氏は在学中から時々書記生の役を命じて随行させた。ワイヤ

一氏は給水氏に『学者となるより実業家を』勧めた。やがて明治二十二年卒業と同時に東興義塾の舎監兼助教に任命された。これは実に異致の奇遇であつた。

この頃菊池氏は政界に出馬の心算があり、その事務を給水青年に托した。即ち菊池氏の秘書となつたのである。明治二十三年四月菊池氏等の創設した東興日報社に入り成田鉄四郎主筆（給水氏の縁戚、陸奥灣の将来の著者）のもと新聞の編集に當つた。

菊池氏は明治二十三年才一回の総選挙に當選したので給水氏は之に随つて上京し才一議会の通信員となつた。氏の談によればこの時東興日報社から旅費十円を給せられ青森一函館一横浜一東京のコースで上京したという。

また東北線が開通しない時であつたからその方は最も早や道であつたのである。

二十四年三月議會が終ると通信任務も了えたので、弘前へ帰らねばならぬが将来期する所がある給水氏はこの好機を逸せず如何なる困苦も忍ぶ覚悟して進学の志を立てた。先達岩川友太郎氏は明治九年米人教師ウオルフ氏を送つて上京し、そのままとどまつて進学したことを知つていた給水氏は、その道を踏まんとする用意があつた。先達成田鉄四郎氏から同意を得、菊池氏にその希望を述べた。菊池氏も給水氏の体質を考慮し新聞人から転向することに賛成してくれた。給水氏は生れつき体は虚弱な方で持病（脱腸）があり新聞人のような勤務は不適當だと心配していたから菊池氏もその心情を察して許してくれたのである。

それからこの年、大学専科・商業講習所・水産講習所・蔵前高等工業等に受験の姿勢で勉強した。蔵前高工は最も先に試験が行

なわれ受験者六百人中主席で合格、機械科に入つた。

この時給水氏は二十二年才であつた。その頃一般青年の夢は、(1)政府の要路に立つて國家経綸の衝に當つて見たい。(官吏・政治家)、(2)軍人になつて名をなして見たい。(3)外交官になつて國際の場に雄飛して見たい、(4)言論界に入つて社会の木鐸になつて見たい。(5)学究に進んで新生命を開拓したい。(6)文学の道に進んで自分の理想を具現して見たい。など思い思いに大きく、将来の夢をもつていた。併しその夢を選んで進むには何れも色々な制約を受けねばならなかつた。辺疆の弘前藩は勤王に参加したものの、時の政府内に醜された藩閥には力弱く、四民平等とはいうものの門閥財閥の壁は敵しかつた。殊に下級藩士はその抵抗を覚悟せねばならず、実力をもつてその壁を打ちくだく用意が必要であつた。

そこで(1)(2)の場合は花々しいが壁があまりに厚く、これにいんどんだ多くの青年は、愛れた資質を持ちながら、名もなく倒れていつた。律彙が明治百年に大臣大将を送ること極めて稀であるのもこの事情を見逃してはなるまい。

(3)(6)は文明開化の場であり、本人の資質と努力次第で運が開ける見通しもあつた。この方面に向つた青年の活動は明治文化に大きな足跡を残している。これを考えると明治月年の試験は精神力と財力で誰い分けられたことが分る。この試験を哲学的に系統化し青年に示標を与えたのは、伊東重氏の養生新論で、明治二十五年初めて我が郷党に呼びかけたのである。

これまでの青年は財力の乏しさに苦しみながらも、天下國家を論じていたが産業經濟を論じて富を貯えようとするものは、寧ろ

卑下される傾向があつた。伊東氏は当時大学出の新進弘前病院長で、心と体と財産の三力に余裕を持つた人間でなければ國家社会の用材とはならぬという哲学を、地方青年の指導理念として発表したのである。

船水氏の左右には近親(3)に進んだ珍田氏あり、言論界を旨とす成田哲四郎氏や先輩の本多庸一氏、陸羯南氏等あり、学究に進み郷里に医業を開いた伊藤重氏、生物学に進んだ岩川友太郎氏(東京女子高等師範学校教授、今上天皇に貝類の進講者)がいた。特に政界の菊池氏に私淑した所からいへば、ワイカー氏に進められたとはいひ美業界に進むことには感うたであらう。然るに明治二十四年二十二才の時エンジニヤに婚み切つて藏前高工に進んだことは伊東氏が養生哲学を発表した時と前後して当時の地方青年に一方を示したものとして重要である。

東奥日報社をやめ受験準備中は先輩岩川友太郎氏の養生として働き、高工在学中は同郷の美業家飯田義氏から学費の補助を得た。

### 三、製紙界に身を投じ欧米に留学

高工在学中も成績抜群で、校長手島精一氏の知遇を得、卒業期に農商務省が経営していた製紙工場を見学した。

紙の発明は遠く西紀一〇五年、中国後漢の蔡倫によつて行われたと伝えられるが日本には推古朝(六二〇)年に高麗僧曇徴によつてその手法が伝えられ、それ以来和紙は専ら植物の樹皮を原料にして色々改良が加えられ、平安時代には僧空海が唐からもたらした手法によつて、高野山の僧侶の間に抄かれた。それを高野紙といつた。その後各地に製紙の事業が起つたが、その手法を習得す

るには七ケ年もかかる有様で、特殊技術であつた。従つて量産は従来の方法では限度があり、紙は益々貴重品となつた。

紙の消費量は正に文化の程度を計るということは、東西同じであるが、ヨーロッパでは活字が副製され印刷術が発明(十五世紀中頃)されてからは紙の需用は著しく高まり、製紙事業は之に応じて俄然新機軸をなし、発展したのである。

即ち原料は樹皮繊維だけでなく、本質繊維も使用し、抄き方も機械抄によつて短時間に大量に生産する仕組になつたのである。

明治元年海外視察一行に加わつた渋沢栄一氏はヨーロッパの製紙事業に驚き、帰つて早速政府事業として洋式の製紙を計画したが、政府要路者にその認識なく、実現しなかつた。その後明治六年漸く会社が組織され全八年七月東京郊外王子村にアメリカ製の機械が据付られ、アメリカ人技師によつて操業が始まつたということである。

これとは別に明治七年浅野家が日本橋水天宮の附近に英國製の抄紙機を据えて、英人技師を雇い入れ、洋式の紙を抄いたが印刷用の紙を作るまでに進歩したものはなかつた。明治二十七年船水氏の見学した製紙は欧米のそれに比べると問題にならぬ幼稚なものであり、まだ日本人の手による独立した経営に至らなかつた。そこで船水氏は一生を製紙界に投じようと決意したのである。

当時世界で製紙事業が最も大仕掛に、そして進歩していたのは仏の長網式抄紙機による抄き方と、原料処理ではドイツのバルブ事業であつた。

既に製紙界に決意した船水氏は明治二十七年卒業と同時に富士製紙会社に入社した。それは同郷人であり、船水氏の支持者であ

つた飯田義氏の推薦によつたのである。

明治三十四年、商務省は、製紙の研究員を二人、海外に派遣することに成り、アメリカと独逸を予定した。この時、給水氏は滋賀泰山氏の推薦によつて候補者となる事が出来た。詮衡の際、係員は独逸語が出来るかと同うた。給水氏は躊躇することなく、出来るといつただけでこの関門をパスした。実は独逸語は出来なかつたが行けばどうにか出来るという自信があつたので、そう答へたとその頃のことを述懐していた。

こうして待望の海外研究の緒につき三十四年五月、正式に商務省海外実業練習生として三ヶ年、留学の辞令をもらひ、全年十月横浜を出帆し、印度洋を経、マルセイユから陸路独逸入りして、ドレスデン工業大学の繊維科へ入学した。その傍、製紙各工場に於て現業練習も行つた。

その頃独逸に日本人の留学生は極めて少かつたが、津軽英麿公は既に滞独十五年になり、ベルリン大学在学中であつた。給水氏は東京出発に當つて、津軽家に渡歐の挨拶に行つた。この時、承昭公から饗別を頂き、英麿公へカキモチの土産を依頼された。到着するや否や英麿公を訪問し之を届け、東京の安否をお伝えした。その後時々御会い申し上げ、英麿公からは滞独生活の色々な心得を教導された。或日郷里の青年の育英事業などについて、相談を持ちかけられたことがあつた。後の青森県英学会の構想は既にこの頃から、英麿公の心中にあり、給水氏はその設立に努力した因縁はここに始まつたのである。

独逸滞居は二ヶ年であつたが、その間休暇を利用して欧州各地を廻り、見聞を広めた。給水氏が学究に熱心であり國を思うため

にやつたエピソードがある。ドレスデン大学の附属製紙工場で実習した時のことである。工場には縦寛謝絶とか特別許されても一切中で記録は許されない制であつた。それでペンや紙切は持ち込むことは出来なかつた。パテントのある機械や独逸産業を保護する國の政策によるものであつた。給水氏は幸ひ、この中の作業研究は許されたものの、機械の寸法が分らなくてはいつまでも独逸製の機械に依存するより仕方がないことを遺憾に思い、何んとかしてその寸法を知りたかつた。そこで実習中自分のワイシヤツに細かに書いた。熱心さの余りそこに教授が入つて来たのに気がつかなかつた。教授はいじらしく思つたのであらう。測に寄つて笑つて紙を与えた。そのお蔭で速慮なく寸法を測り持ち帰ることが出来た。このようなことは日本の工業が、先進の独逸から独立するための一コマである。

在逸二ヶ年、余暇ある毎にヨーロッパの各地を廻り、製紙界を一応見学した。給水氏は序にアメリカの現状も実地に知りたかつた。折よくその頃、珍田捨巳氏は外務省の総務部長であつたので、その斡旋を岡氏に頼み、明治三十六年アメリカに転学を命ぜられた。

アメリカではニューヨークの北方六百マイルの山中にある、製紙工場を選びそこに止まること五ヶ月、研究を遂げ、それからアメリカ各地の製紙工場を見学し、シカゴについた。その時、日露の間の風雲が急であることを知り、急いでサンフランシスコに行き、更給を得、ハワイを経て横濱に歸つた。それは明治三十七年一月三十日であつた。

#### 四、日本の製紙界に活躍

帰朝後間もなく王子製紙は船水氏を技師として迎えた。氏が三十四才の時である。そして王子分社工務係長、次で中部分社工務係長になり縦横に手腕を振つた。殊に中部工場の機械修繕には、月餘を要するものであつたが不眠不休工場に泊り込み、萬難を排して一週間で之を仕上げ、業界を驚かしたことがあつた。

明治三十九年王子製紙を辞して利根製紙を興し、取締役兼技師長に就任し、再び独・英両国に出張研究して帰り、日本で始めてハトロン紙を作ることに成功した。

明治四十一年九月には農商務省山林局の内命によつて、日露戦の賠償によるカラフト森林の利用計画を建て、パルプ工場の設計などのため、現地へ乗り込んで調査をした。この頃同郷の葛西耕芳は、千歳の硫黄を開発し函館に基地を置いて北方海運に従事していたことから、船水氏と深い交友となつたものらしく、葛原氏の千歳探検手記を船水氏に托していた。(この探検記は船水氏晚年私に托し、今弘前図書館に保存している川陸奥史談に逐次発表) 明治四十二年には独逸のイリス商会の工場長クロン氏と共同研究の要請により、三たび渡歐し製紙機械ソフトウェアの特許を独逸政府に出願して特許才一八四一一号の登録を得、十月帰朝して四十五年十月東京イリス商会に入社した。それ以来二十余年東京イリス商会の支配人代理を兼務し、製紙機械及原動機関部等を扱つた。その間大正七年には大森に艶紙の製造会社を興して専務取締役になり、大正十一年四月には日本紙器製造会社主事、工場長など兼務し、日本の製紙界に大きな足跡を残した。

昭和五年十二月健康を害してイリス商会を辞し製紙事業界の現場を離れたのであつた。

#### 五、船水氏と修養社及び青森県奨学会

社団法人修養社は明治三十三年東京に遊学する地方青年のために旧藩公を煩わして作つたものである。明治初期以来志を立て、東京に学ぶ者の最も困つたことは、その宿がないことであつた。郷里と事情が違ふ所に出て、とかくする内に都の不健全な気風に染み、折角の志もくじける輩も出た。そのことを身をもつて味わつた先輩有志は、郷党出身の実業家に協力を求め、承昭公を動かして、小石川竹早町の津軽家別邸の屋敷内に、郷里出身の学生寮を造り、兼ねて東京と郷里との連絡を図る機関としたのである。それ以来大正十二年関東震災に逢うまで、二十五年間に郷党の青年千二百餘名はこの修養社を根拠に勉強したのである。船水氏が修養社に直接関係したのは一戸兵衛氏の社長時代からである。修養社の事業が、更に拡大されなければならぬ気運が起り、学生寮も改造の必要があつた。その頃別に青森県奨学会が設立された。それは大正七年であるが、その発端はさきに船水氏の独逸留学中に述べたように英曆公の発意に依るものであり、大正六年五月六日修養社才十八回記念式典に當つて、郷党青年の育英事業を興す必要が提唱され、満場の賛成を得、翌七年三月二十一日青森県奨学会創立総会が開かれたのである。その時の会則を見ると才三条

に  
本法人は青森県の学芸を奨励し人材を養成し兼ねて実業の発達を謀るを以て目的とす。

とあり才四条に

(1) 優良学生の学資補助

(2) 学生寄宿舎の設置若くは其補助

(3) 小学及中学教師の見学旅行講習会及講演会の開催若くは其補助

(4) 学芸の奨励及其研究者に対する補助

(5) 高等教育機関に対する補助

(6) 実業の調査及研究若くは其補助

(7) 其他理事会に於て必要と認めたる事業

等があげられ、貸産及会計についても、細かく規制され、財源は設立者並に県民有志の寄附を以つて充てるとしてある。その案は当時東京に辯護士翹業していた平沢均治氏と、鉛水氏が作製したものとされる。

理事長 津野英蔵、副理事長 岩川友太郎

理事 平沢均治、鉛水武五郎。今 裕

監事 反田義、高谷豊之助

としてある。大正七年は鉛水氏は四十八才、活動盛りの時代で自分の事業としても大株に艶紙の製造会社を興し寸暇もなかつたと思われるが、郷党後進のために寝食を忘れて函り、平沢氏と二人、郷里の有力者を濫訪して、会員の募集に當つたことは、今知る人は少いであろう。

そうして着々その基礎を作りあげていた。所が大正十二年八月關東大震災が起り小石川の修養社は大損害を被り、学生の寄宿にも壊えられない程破損した。鉛水氏は一戸社長を助け修養社に泊り込んで学生を奨励したことは当時在舎の方々には忘れ得ぬことで

ある。

大正十三年五月二十七日修養社創立二十五周年記念祝賀会に集まつた方々は修養社の現状を見、大修繕を必要とし、その後議を重ねること致回青森県奨学会に合流して、経営することに一決し、修養社の目的を継承することを条件として一切の資産を青森県奨学会に寄附することに決め、大正十三年九月二十六日思出深い修養社は解散したのであつた。そうして新に吉祥寺附近に土地を求め旧修養社の建物を移転改築の計画を立て、皇室の御料林から材木御下賜の出願をして工事に取りかかつたのである。このようにして、大正十四年三月吉祥寺の寄宿舎本館二百九十八坪余の堂々たる青森県奨学会の学生寮が完成した。この間、郷党の先達は一致協力して後進のために骨を折つたことはその時の事業成績報告書に明であるが、鉛水氏はいつも理事、或は評議員の席に連つてゐる。この小石川乃至吉祥寺の学生寮に収容された当時の学生の名簿を見ると、今、県内外に活動している初老以上の有名人は殆どそこにはいた方々のようである。

さて太平洋戦争が苛烈を加え学徒が動員されて戦場に或は工場に出て行き、学生寮に止まるものはなくなつた。そうする内に遊休建物の接収が行われ、昭和十九年遂に外務省に買取される運命になつた。終戦後学生が学校に復帰した際は、既に学生寮はなくなり、建物は残つていたが海外引揚者の住宅に充てられていた。途方にくれた学生達は鉛水氏を訪ねて相談を持ち込み、鉛水氏は吉祥寺に弘前の人福士美造氏が所有する家屋を斡旋して、当座の宿舎に充てた。その後、老瀛を提げて幾度か元の学生寮取り戻しに関係者と交渉を重ねたが、遂に物にすることが出来なかつた。

戦争の犠牲とはいいながら、青森県にとつてもまことに残念なことである。

## 六、船水氏の家庭

船水氏の夫人保子氏は山形県天童出身で、城主城田氏の家老職を勤めた野田家の女である。

父亀平氏は仙台藩小原家から野田家へ入婿した人であつた。祖母野田鶴女は、孝貞の尾籠として山形県知事から表彰された方であり、天童市には今も尙記念の野田文庫が保有されているということである。保子夫人は、幼少の頃から父の兄小原文平氏の養女となつてゐた。小原氏は元弘前市三十一聯隊長であつたが日露の役黒溝台で戦死を遂げた。船水家へは小原家から嫁いだのである。夫人は教養も高く発句、和歌等もよくし趣味も多く多芸の人である。夫君と二人弘前へ疎開された時は物資も甚だ欠乏の時であつた。船水氏は会社退職の際慰勞に平内地方の山林を贈られた。老後はそこで山を育てながら推茸でも栽培して樂しもうとして先づ郷里弘前へ歸つたらしい。所が土地改革やら開拓道地の措置を受け、その望みは断たれてしまつた。氏の功績に報いるに、この始末ではまことに氣の毒なことであつた。

しかし夫人は少しもそれを氣にかけける風はなく、いそいそと立ち働いて茂森新町の自宅前に厩台を作り氷水や駄菓子屋を始めた。

既に七十に近い老夫人とは思えない張りきり方で、近所の方々とも心安く交際して居られた。三十代の時分、腎臓結核を患い片方を振出したといふことは、私の家内が腎臓振出する際に語つて力をつけてくれたので分つたが全く信念に満ちて明るく働いてゐた。

一女タカ子は伊予松山の丹生谷進氏に嫁ぎ五男二女をあげたが夫君は昭和十六年神戸製鋼所鳥羽工場勤務中戦時作業の過勞がたたり遂に訃れた。一家の支柱を亡くしたタカ子は七人の子を抱えて苦闘する姿は想像に余りあるといえよう。併し父母の精神を承けたタカ子未亡人は雄々しく立ち上つて、東京駅の八重洲口に同様の運命にあつた夫人達と共同して純喫茶店を開き、そこを足場に子等を守り、真直に育て、何れも大学に入れて道を誤らしめなかつた。目下、長男は三菱商事スペイン・マドリッドの支店長であり、二男は船水家を継ぎスイデン会社に勤務中。其他の方々も何れも独立の生活を営んでゐるといふ。

苦闘して築き上げた船水一家は積善の餘慶を満喫して居られる。保子夫人は本年八十八才、大海の自宅で娘タカ子未亡人や孫、曾孫に守られながらまだ元氣に餘生を送られてゐる。